

# 「資料紹介」

川田順造編 アフリカ入門 東京  
新書館 1999年 429p.



放送大学の講義「人間を知る——アフリカ論——」で使用された教材本『アフリカ論』（放送大学教育振興会 1992年）とその改訂版を基にする27名の執筆者のさまざまな視点が新鮮な、入門者のための専門的概説書である。

本書はアフリカ入門書と題されるも、自然環境、言語、現代アフリカ文学、開発問題、人類・人種、歴史、文化、農耕牧畜、女性、都市、世界観等のテーマについて人類学的視座や隣接分野の最新の知見をコンパクトに網羅しており、自らの専門以外のアフリカを知ろうとする研究者・実務者にも最適な入門書である。

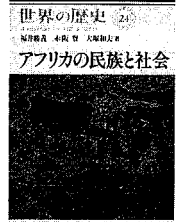
章立てにおけるテーマは多様だが、27名の執筆者のほとんどが人類学研究者である。開発主義、反開発主義から距離をおいた執筆者たちの冷静な分析もさることながら、類似書にありがちな各章間の断絶を感じずに読破できるのは、編集の成果以外の何ものでもない。

編者はその前書きで「日本人とまぎれもない同時代を生き、同時代の問題を分かち合っている大陸としてのアフリカを描き出そうと努めた」（p.13）と述べているように、各執筆者は多数の図表を駆使して、アフリカのさまざまな社会文化的側面の非後進性、非特殊性を記述している。

ただ本書を入門書として手にした読者の視点からすれば、一貫して入門読者への配慮が見られる章と、配慮に欠ける章の差が気にかかった。これは脚注の工夫があれば補足できたのではないだろうか。また21に及ぶ章立てを読みやすくするための部構成、例えばアフリカの自然、アフリカ人、生活、文化、開発の5部構成に分けても良かったのではと思量された。特定例に集中するようなトピックは敢えて囲み記事扱いにするような編集配慮もありえたのではなかろうか。

（吉田栄一）

福井勝義・赤坂賢・大塚和夫著 ア  
フリカの民族と社会〔世界の歴史  
24〕 東京 中央公論社 1999年  
534 P.



国家と国民の存在を疑わず、通史にならされてきたわれわれは、世界をみる場合にも各国史という発想から抜け出せない。多様な歴史叙述の存在はわかっている、専門的な歴史書は手を出しにくい代物であった。

「世界の歴史」はそうした一般読者にもなじみ易いものの一つだが、今回のシリーズは、またひと味違うようである。その第24巻『アフリカの民族と社会』は3名の人類学者の手になる1冊で、本文は「自然と民族」、「都市と王国」、「イスラーム」を切り口とした3部から成っている。第1部はオーソドックスに大地溝帯と「ルーシー」からはじまるが、すぐさま「砂漠化」に話を展開し、アフリカにおける自然と人間の相互関係、生態と歴史が論じられてゆく。本書の基本的な視角である民族を解説するだけでなく、これをめぐる開発や紛争にも言及した点が真骨頂であろう。

第2部のキーワードはアフリカ域内での交流である。まずは大陸各地に栄えた王国間の、次に商業とともに発達した都市を拠点とする地域間の、さらには植民地支配をもたらした外部世界との関係史が展開される。

続く第3部はアフリカ土着のユダヤ教、キリスト教から話を起こして、イスラームの歴史へと論を進める。民衆主体の「中世的」イスラームから、改革運動を原動力としたアフリカ各地への拡大、そして復興運動の様相を論じた後、「近代」の在り方で締めくくる。

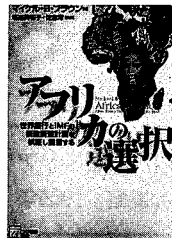
随所に挿入されたカラー写真が理解をたすけることはもちろんだが、ふんだんに盛られたエピソードや、さりげなく挿入された研究史への言及も読者を刺激する。1998年までカバーした年表も見やすくできており、索引や充実した参考文献リストをあわせて考えれば、この本は実にお買い得である。

（望月克哉）

コーラ・アン・プレスリー著（富永智津子訳）アフリカの女性史：ケニア独立闘争とキクユ社会  
東京 未来社 1999年 290p.



マイケル・B・ブラウン著（塩田美和子・佐倉洋共訳）アフリカの選択 東京 柘植書房新社 1999年 470p.



叙述の対象はケニア，時期は植民地化前後から独立運動期に絞られており，膨大な文献資料とインタビュー調査を踏まえた確かな史実の再構成が行なわれている。本書の構成は以下のとおり。

#### 序章

第1章 女性・家内生産・社会組織

第2章 女性と植民地経済

第3章 キアンブ県における女性労働者の抵抗（1912-1960）

第4章 文化の変遷——女性と宣教師団

第5章 キクユ女性と政治組織（1920-1947）

第6章 キクユ女性とマウマウ闘争

第7章 マウマウ闘争・キクユ女性・社会変化

#### 結論

本書の特徴は，対象の性別を特定しない従来の歴史記述が事実上の「男性史」であったとの認識に立ち，政治・社会史分析の対象をあえて女性のみ絞った点にある。視点を「女性史」に固定することによって逆にその成果は「女性史」の枠を超え，既存のケニア独立闘争史理解や社会史理解そのものに一石を投じるいくつかの発見——キクユ女性は闘争に積極的に参加していたこと，その参加がその後のキクユ女性の社会的地位の向上につながったことなど——に結びついていく。学術書としての意義深さはもちろんであるが，読み物としても読者を魅了する力を持った作品である。

こうした文献を日本語で読む環境が整えられたことで，今後はこれまで以上にアフリカ研究やケニア研究，そしてアフリカ女性史研究を志す人々が増えるのではないだろうか。巻末に付された訳者の富永氏によるノートでは，ケニア独立史が日本にどのように紹介されてきたかがさまざまなメディアを取り上げながら辿られており，こちらも興味深い。

（津田みわ）

1995年にイギリスで出版された *Africa's Choices: After Thirty*

*Years of the World Bank*の翻訳である。著者は1918年生まれのイギリス人経済学者で，オルタナティブ・トレードで有名なNGO，TWIN（第三世界情報ネットワーク）の代表とTWIN貿易株式会社の社長を務めている。これだけ大部な本の翻訳に携わった訳者の労をまずは称賛したい。

特にアフリカ開発協力の仕事に興味を持っている人に，開発の視点からアフリカ近代通史を幅広く把握するための好著として薦めたい。奴隷貿易の時代から1990年代初頭に至るまでのアフリカ史を，広範な地域に目配せしながら，さまざまな話題に言及しつつ解説してくれるからだ。確かに大部ではあるが文体は平易で，基礎知識がなければ分からないような専門的議論に墮くこともない。キャリアを積んだ学者があるテーマについて集中的に読書し，その結果頭脳に結晶した映像を，自信に満ちた筆致で楽しみながら書き連ねていったという印象である。

ただし，そういった本書の性格からして，研究者が学術的なものを期待して当たるには適さないだろう。研究上の貢献や，新しい議論が見られるわけではない。「世界銀行とIMFの構造調整計画を検証し提言する」という訳書の副題に関心をひきずられると，大部であるだけ若干退屈の感は否めない。「もし，もう一度始めるのだったら，やらないことがある。一つは地方政府を廃止したこと，もう一つは協同組合を解散したことである」（ニエレレ，68p.）、「工業化への秘訣は農業を迅速に進歩させることであり，特に1人当りの食糧生産の増加の方策である」（ルイス，105p.）、「効果の無い国家建設への努力におよそ三十年間を浪費してきた」（オパサンジョ，214p.）。こういった言葉が，いまさらながら胸に迫る。

（平野克己）

辻村英之著 南部アフリカの農村協同組合：構造調整政策下における役割と育成 東京 日本経済評論社 1999年 274p.



本格的な単著の研究書である。著者は本書の中で、構造調整政策下におけるタンザニアとナミビアの協同組合の事例を主に取り上げている。しかし著者の意図は、アフリカの協同組合の単なる事例分析ではない。本書の目的は、「大衆の貧困緩和に貢献するどころか、逆にそれを悪化させる傾向にある」(p.3)構造調整政策の限界に対処する方法として、農村協同組合を位置づけ、その望ましい育成手法・政策の提言をおこなうことである。したがって本書は研究書であると同時に、南部アフリカの貧困問題の解決を視野に入れた、政策提言の書でもある。

南部アフリカにおける農村協同組合の育成に際して、著者が重視する手法は三つある。それらは、(1)単営・専門化や経済性重視にこだわらず、民間業者が提供できない機能を充実させて小農民を協同組合に引きつけること、(2)自律・独立の原則に過度にこだわらずに、協同組合の資金と技術の不足を、NGO等の支援組織の協力で補うこと、(3)小農民の伝統的な価値観、制度、組織、技術等を活用した育成を試みること、である。著者はこの結論に、協同組合の具体的な事例の分析を通じて演繹的に到達している。

著者が議論の中で援用している従属論の諸概念の今日的な妥当性など、本書の個別な内容については、議論の余地がかなりあると評者は考える。しかし、そのような個別の議論は別として、著者が単著の研究成果を世に問うたこと自体を高く評価したい。著者自身も、「新しい経済開発の枠組みを議論する好機であると考え……出版を急いだ」(p.266)と書いているが、このような積極的な態度が、今後の日本のアフリカ研究を活性化するエネルギーとなるのだと思う。

(高根 務)

小倉寛太郎(文・写真) 東アフリカの鳥 東京 文一総合出版 1998年 207p.



本書は、東アフリカでサファリをする日本人向けに、日本語で読める鳥類のフィールドガイドを提供することを狙いとしたものである。東アフリカで観察できる千数百種の鳥類種の中から、サファリの定番コースで見られる可能性の高いものと興味を引くものを厳選し、202種について写真付きで解説(識別・同定のための特徴と分布)を加えている。さらに、ウガンダ、ケニア、エチオピア、タンザニアの主要探鳥地案内、撮影の手引きと旅の情報、参考文献と和名・学名索引が盛り込まれている。

写真はすべて著者の手によるものである。フィールドガイドという性格上「標本写真」——審美的な基準よりも、種の同定の手助けになるように鳥の特徴を押さえることを優先した写真——が中心になったと著者は謙遜するが、これだけの種について、しっかりと撮影することは、一朝一夕にできるものでなからう。

「標本写真」という言い方には、逆に、すごみが感じられる。

東アフリカ・サファリの「目玉」といえば、サイやゾウやライオンといった大型哺乳動物である。こういったサファリの「スター」を観ることはもちろん楽しくかつ素晴らしい。しかし、鳥というこの「小さき生き物」たちの姿を観ることにこそそれにまったくひけを取らない素晴らしさがある。調査や仕事为目的でサファリどころではないとお考えの方にもぜひこの本をお勧めしたい。都市であれ村であれ、人の住む土地にも数多くの鳥が生活を営んでいる。本書に採録された種でも、都市部で観られるものは多い。飛ぶ鳥を見つけたら、しばし立ち止まってその姿をじっと見つめ、名前を調べ、その暮らしぶりを知る。そうやって自然の豊かさに触れ、さらには「鳥を観ること」の文化としての深みに触れてみるのはいかがだろうか。本書は、その格好の手引きとなるはずである。

(佐藤 章)

マビヌオリ・カヨデ・イドウ著  
 (鈴木ひろゆき訳) フェラ・ク  
 ティ：戦うアフロ・ビートの伝説  
 東京 晶文社 1998年 181+  
 ix p.



ナイジェリアでは庶民が警察官を蔑んでイエロー・フィーバー（黄熱病）と称してきた。その質の悪さと、かつての制服のカーキ色に引っ掛けているが、起源はヒット・ソングの歌詞にある。ほかでもないフェラ・アニクラポ・クティの作詞作曲で、文字どおり「大流行」したものだだった。

フェラをめぐる伝説は枚挙にいとまがない。ミュージシャンとしての派手なパフォーマンス、メッセージ性の高い楽曲もさることながら、ナイジェリアの庶民を引きつけたのは彼自身、フェラという人間そのものであった。反権力、パン・アフリカニズム、彼の姿勢はさまざまに形容されてきたが、このような「ラベル」によってフェラを論じるのではなく、フェラ自身の言動から彼を語ろうとしたのが本書である。

著者イドウは、1974～83年というフェラの最盛期とも呼ぶべき時期をともに過ごした人物である。多くのナイジェリア人と同様に、著者もまたフェラと権力の対決を目撃し、フェラが発するメッセージに引き寄せられた1人であり、かつよき理解者であった。フェラの「精神的変化」（客観的には変節）によって袂を分かつことになったが、その思い入れは変わらず、86年に本書の英語版を上梓している。

1997年に仏語版が出版され、それからちょうど1カ月後にフェラは逝った。今回の翻訳はこのタイミングをとらえて実現したものにほかならない。作業が仏語版をベースとして進められたおかげで、著者がフェラのもとを去った経緯が明らかになり、またフェラの「精神的変化」を暗示する96年のインタビューも採録されることになった。各章冒頭に掲げられたフェラの歌詞も、本書のメッセージをより明確なものにしたと言えるだろう。末尾の深沢美樹氏によるディスコグラフィも読者にはありがたい。あとは迷わず曲を聴くだけである。

(望月克哉)

船尾 修著 アフリカ：豊穡と混沌の大陸（赤道編）（南部編）  
 東京 山と溪谷社 1998年  
 270p.；269p.



初めてアフリカを訪れたのが1984年、以来通算で4年近くをアフリカで過ごしているというフォトジャーナリストによる紀行記が出版された。本書は著者の93年から96年にかけての2年半にわたるアフリカ縦断の旅の記録である。

登山家としても知られる著者による、しかも山岳図書を専門とする出版社から出ている本だけに、本書はキリマンジャロ、ニイラゴンゴからマダガスカル原猿の森まで、アフリカの山々と自然の魅力に満ちあふれている。ところが、本書の魅力はそれだけにとどまらない。著者は山に登るためにアフリカに行く。しかし、『『登頂証明書』と雄大な自然のパノラマに魅かれてアフリカくんだりまでやってくる』登山客の多くがポーターやガイドの生活になど興味を払わないなかで、著者はポーターたちの暮らす町の日常にもずっと溶け込んでゆくのである。彼らと同じものを食べ、飲み、同宿し、語りあう——なぜ山に登るのかと不思議がられつつ。旅は楽しいばかりではなく、とくに南アフリカでは嫌な思いをしたようだが、ところどころに出てくる西洋文明批判的な言葉も、失われたアフリカ的なものへの憧憬であったり、アフリカの単なる美化になってしまうわけではない。このあたりの「等身大」さ加減がとてもすがすがしいのだが、これは山という、相対すると人間の小ささを感じ入らずにはいられないものに魅せられた人ゆえのことだろうか。

本書には多数の写真が掲載されているが、巻頭の数ページ以外はカラーでないのが惜まれる。『朝日新聞』（1999年1月10日付朝刊）に掲載されたインタビューによると、写真集も出版予定のことだから、それを楽しみに待ちたいと思う。

(牧野久美子)